

【原著論文】

# 3 歳児の援助要請行動と気質および完全主義との関連

西元 直美\*

Relationship of help-seeking behavior with temperament and perfectionism in 3-year-old children

Naomi Nishimoto

## 要 旨

本研究は3歳児のデータを用いて、援助要請行動と気質と完全主義との関係について検討することを目的としている。認定こども園に通う3歳児クラスの園児の養育者を対象として「幼児用援助要請行動チェックリスト」「気質尺度」「幼児用他者評価型完全主義尺度」についての質問紙調査を行った。幼児用援助要請行動チェックリストの回答結果について各項目についての回答分布は、言語的要請に分類される項目群では「非常にあてはまる」という回答に偏る傾向があり、非言語的要請に分類される項目群では「全くあてはまらない」という回答に偏る傾向がみられた。幼児用援助要請行動チェックリストの因子得点（言語的要請得点、非言語的要請得点、間接的要請得点）の差を検討したところ、言語的要請が最もよく行われる援助要請行動であり、次いで間接的要請、そして非言語的要請はあまり行われていない要請行動であることが示された。また、間接的要請得点には性差が認められた。援助要請行動と気質下位尺度との関係を検討したところ、言語的要請と「微笑みと笑い」の相関関係が認められた。非言語的要請は「かなしさ」「内気」と正の相関関係が認められた。間接的要請は「不快」「怒り／欲求」と正の相関関係が認められ、「抑制のコントロール」「反応性の低下／なだまりやすさ」と負の相関関係が認められた。援助要請行動と気質との関係について男女の違いがみられた。援助要請行動と完全主義との関係を検討したところ、言語的要請には完全主義との間に相関関係は認められなかったが、非言語的要請は完全主義との正の相関関係が認められた。以上を踏まえ、3歳児の援助要請行動および援助要請行動と気質、完全主義との関係について考察され、今後、4歳児、5歳児の縦断データを踏まえた検討が必要であることが示された。

## Abstract

The purpose of this study is to examine the relationship of help-seeking behavior with temperament and perfectionism. A questionnaire survey was conducted based on the help-seeking behavior checklist for young children, the temperament scale, and the other-evaluation perfectionism scale for children. We examined the responses to the help-seeking behavior checklist for young children. In the results, the response distribution for each item tended to be biased towards 'very applicable' responses for items classified as verbal help-

受付日 2023. 9. 8 / 受理日 2023. 12. 22

\*関西福祉科学大学 教育学部 教授

seeking. Items classified as non-verbal help-seeking tended to be biased toward the response of 'not applicable at all'. Differences in factor scores (verbal help-seeking score, nonverbal help-seeking score, and indirect help-seeking score) of the help-seeking behavior checklist for young children were tested. The results showed that verbal help-seeking was the most common type of help-seeking behavior, while non-verbal help-seeking was the least frequently used type of help-seeking. There was a gender difference in the indirect help-seeking score. We examined the correlation between help-seeking scores and temperament. The results showed that correlations between each help-seeking score and temperament were different. The correlation between help-seeking and perfectionism was examined, and no correlation was found between verbal help-seeking and perfectionism. However, non-verbal help-seeking was positively correlated with perfectionism. The help-seeking behavior of 3-year-old children and the relationship between help-seeking behavior, temperament, and perfectionism are discussed in light of the above.

● ● ○ **Key words** 援助要請行動 help-seeking behavior/気質 temperament/完全主義 perfectionism/幼児 young children

## I 問題と目的

困ったときに適切に「助けて」と言えること、自分の力では解決できないときに必要に応じて他者に援助を求めることは、社会生活上に生じた様々な困難に直面した時の対処方略のひとつであり、適応能力のひとつともいえる。他者に援助を求める行動すなわち援助要請行動 (help-seeking behavior) は「個人が問題の解決の必要があり、もし他者が時間、労力、ある種の資源を費やしてくれた場合、問題が解決、軽減するようなもので、その必要のある個人がその他者に対して直接的に援助を要請する行動」(DePaulo, 1983) と定義されている。援助要請は積極的に対処を行うコーピング方略であり、望ましい方略であること (Rickwood, Deane, Wilson, & Ciarrochi, 2005) や、他者の資源を用いないコーピング方略よりも有用である (古橋、五十嵐, 2021) ということが指摘されている。また、援助要請行動が適応に寄与することを示す研究として、必要な場合に援助を求めることが生活適応感を促進させることを示す大学生を対象とした研究 (石黒・榎本・山上・藤岡, 2016) や、援助要請が学校生活享受感を高め、ストレス反応を軽減することを示す中学生を対象とした研究 (本田・新井・石隈, 2015) が挙げられる。

援助要請行動あるいは援助要請に関する研究は乳幼

児期を対象にしたものが極めて少ないことが指摘されている (本田, 2015)。乳幼児期を対象とする研究では行動を観察した研究がいくつか挙げられる。実験室における課題解決場面での援助要請行動を観察した研究として、2、3歳児を対象とする援助要請行動を行う対象 (援助者) の選択を検討した研究 (Cluver, Heyman, & Carver, 2013) や、2~5歳児を対象として援助要請行動の頻度と課題の難易度との関係を検討した研究 (Thompson, Cothran, & McCall, 2012)、3歳児と6歳児を対象として援助要請行動を行う早さの年齢差を検討した研究 (Benenson & Koulazarian, 2008) などである。また、池田・岡田 (2019) は3歳児から5歳児を対象として保育場面での援助要請行動を観察し、日常場面における援助要請行動を検討している。このように、乳幼児期を対象とする援助要請行動研究は行動観察によって捉えようとするものが多いが、西元 (2021) は生活場面全般における援助要請行動の実態を明らかにするため、養育者と保育者に対する質問紙調査 (自由記述) から乳幼児が援助を要請する状況、その方法 (行動) についての情報を収集し、援助要請行動が生じる状況、援助を要請する具体的な行動を整理し、年齢的变化についての検討を行っている。さらに、自由記述による質問紙調査の結果を踏まえて援助要請行動を定量的に捉えるべく幼児用援助要請行動チェックリストの開発を行っている (西元・山本,

2022, 2023)。

上述のように、発達初期における援助要請行動に関する研究がいくつかみられるものの、幼児の援助要請行動を質問紙調査によって定量的に捉える試みは極めて少ない。そのため、これまでのような援助要請行動の乳幼児期における実態調査に止まらず、乳幼児の援助要請行動を定量的に捉えその規定因や発達機序についての検討が必要である。そして援助要請行動の発達機序を検討するにあたっては幼児期の援助要請行動と個人特性について縦断的調査を行い、そこから得られたデータによる検討が必要である。

そこで幼児の援助要請行動を定量的に捉え、援助要請行動に影響する個人特性との関係を検討するための縦断研究を計画した。対象は3歳児から5歳児であるが本研究はその初年度にあたる3歳児のデータを用いて、援助要請行動に影響する個人特性として「気質」と「完全主義」に注目し、援助要請行動と個人特性との関係について検討を行うものである。

援助要請を規定する個人特性として栗林 (2019) はシャイネスを取り上げ、シャイネスの高いものは低いものよりも援助要請を回避し、サポート受容が低いことを示している。また、新岡 (2018) は援助要請に対する自己開示の関連を検討し、女性については友人に対して自己開示をよく行う人ほど援助要請に対する志向性が高いことや、問題が軽度であっても積極的に援助要請を行う傾向があることを示している。いずれの研究も対象は大学生であるが、シャイネスや自己開示といった個人特性の源流となるのは、比較的生的な情動反応の傾向であり、生的な行動特徴の個人差「気質」であると考えられる。そのため発達初期の援助要請行動の規定因として「気質」を検討することとした。

また、「完全主義」は過度に完全性を求める傾向である。「完全主義」の定義はさまざまであるが、非現実的な高い基準を設定し、それらに強迫的といえるほど固執して、その基準を達成すること (Burns, 1980) と定義されたり、あまりに否定的な自己評価をともなった過度に高い遂行基準を設定すること (Frost, Marten, Lahart & Rosenblate, 1990) と定義される。完全主義は大学生や成人を対象とした研究が多いが、幼児期からその特性は見いだせるものであり、西元 (2015) は縦断データを用いて幼児期における完全主義の発達

や気質との関係を検討している。完全主義は抑うつなどの不適応と関連することが示されているが (Flett & Hewitt, 2002)、他方では精神的健康とポジティブな関係が指摘されている (Frost, Marten, Lahart & Rosenblate, 1990; 大谷・桜井, 1995)。つまり完全主義は適応にも不適応にも関係する個人特性といえる。そうした完全主義傾向を援助要請行動の規定因と仮定し検討する。

## II 方法

**対象** 関西圏の私立認定こども園および幼稚園に通う3歳児クラスの園児の養育者を調査対象とした。本研究では欠損値のない63名 (男児31名、女児32名) 分の回答を分析対象とした。

**手続き** 認定こども園に通う園児の養育者に「幼児用援助要請行動チェックリスト」「気質尺度」「幼児用他者評価型完全主義尺度」への回答を求めた。調査方法は紙媒体による質問紙調査およびWeb調査 (Google フォーム) であった。調査協力園の3歳児クラス担当保育者に養育者への依頼状および質問紙 (Web調査の場合にはQRコードを記載した依頼状) の配付および回収を依頼した。調査時期は2022年9月～10月である。

**質問紙** (1) 幼児用援助要請行動チェックリスト: 幼児の援助要請行動を定量的に捉えるため、養育者や保育者が評定可能なチェックリストとして作成した20項目 (西元・山本, 2022) を用いた。西元・山本 (2022) は、幼児が「何か手助けしてほしい」ときの様子 (年齢、援助要請対象、状況、行動) について、認定こども園に通う園児の養育者およびその担当保育者に記述を求め、行動の記述内容を分類し、3歳以上に当てはまる分類カテゴリーに基づいて、記述内容を参考にしながら質問項目 (20項目) を作成している。回答は「全くあてはまらない」「あてはまらない」「ややあてはまらない」「ややあてはまる」「あてはある」「非常にあてはまる」の6段階 (1～6点) である。

この20項目について、養育者を対象として得られた項目得点についての因子分析の結果では、「言語的要請」因子 (8項目) と「非言語的要請」因子 (7項目) の2因子が抽出されている (西元・山本, 2022)。

一方、同じ20項目を用いて保育者を対象とした研究(西元・山本, 2023)では、「言語的要請」因子(7項目)、「非言語的要請」因子(7項目)、「間接的要請」因子(5項目)の3因子が抽出されている。この分析結果において、「言語的要請」因子の項目は概ね養育者回答の「言語的要請」因子の項目で構成されており、「非言語的要請」因子の項目は全て養育者回答の「非言語的要請」因子の項目で構成されている。また、「間接的要請」因子は養育者回答では抽出されなかった因子であるが、この因子は養育者回答で因子負荷量の低さから除外された項目で構成されている。今回の調査は養育者を対象としているが、上記の2つの分析結果を踏まえ、因子のまとまりのよさ、解釈のしやすさなどから保育者回答の結果から得られた3因子に基づいて、各因子に含まれる項目の平均点を因子得点として検討する。「言語的要請」を構成する項目は3、5、8、10、12、15、17であり、「非言語的要請」は2、4、7、9、13、16、18であり、「間接的要請」は6、11、14、19、20である(Table 1参照)。

なお、項目1については保育者回答の因子分析において因子負荷量の低さから除外されているため、今回の分析においても因子得点の算出から除外している(Table 1では網掛けして表示)。

(2) 気質尺度: CBQ Short Form (Putnam & Rothbart, 2006) (94項目)の日本語版(沼田, 2006)を用いた。CBQ Short Formは15の下位尺度(快(低度)、微笑みと笑い、抑制のコントロール、知覚的鋭敏性、反応性の低下/なだまりやすさ、注意の焦点化、快(高度)、活動性レベル、接近/肯定的な予測、衝動性、不快、怒り/欲求不満、恐れ、かなしさ、内気)で構成されている。回答は「ぜんぜんあてはまらない」「あてはまらない」「少しあてはまらない」「どちらでもない」「少しあてはまる」「あてはまる」「よくあてはまる」の7段階(1~7点)と「判断できない」であり、下位尺度ごとの平均点が下位尺度得点である。

(3) 幼児用他者評価型完全主義尺度: 「子ども用多次元自己志向的完全主義尺度 (Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale for Children: MSPSC)」(23項目)(桜井, 2005)に基づき、幼児を対象として作成された質問項目(19項目)(西元, 2015)を用いた。回答は「全く当てはまらない」「あてはまらない」

「どちらでもない」「あてはまる」「非常によくあてはまる」の5段階(1~5点)であり、3因子構造(「こだわり・心配」「完全願望」「高目標設定」)が確認されていることから各因子の項目得点を因子得点とした。

**倫理的配慮** 調査協力園に対しては研究目的と趣旨、データの取り扱いにおける個人情報保護の遵守を口頭で説明し、養育者に対する調査への協力の同意を得た。また調査対象となる養育者に対しては、事前に紙面にて研究目的と趣旨、データの取り扱いにおける個人情報保護の遵守を説明し研究協力同意書の提出を求めた。同意する場合には調査方法(質問紙調査もしくはWeb調査)の希望についての記載を求め、同意の意思が確認された場合のみ質問紙(Web調査の場合にはQRコードを記載した依頼状)の配付を行った。研究協力同意書の回収および質問紙の回収は個別封筒によって行われた。質問紙調査、Web調査ともに氏名の記載は求めず、Web調査においてはメールアドレスの収集も行っていない。なお、本調査は縦断研究として計画し実施しているものであり、同意する養育者には研究同意書に自ら作成したID(アルファベット3文字と数字3桁の組み合わせ)の記載を求め、そのIDをもって縦断データの照合を行うこととした。本研究の質問紙調査は上記の手順も含めて、関西福祉科学大学研究倫理委員会の承認(承認番号22-16)を受け実施されたものである。

### III 結果

#### 1. 幼児用援助要請行動チェックリストの回答結果

幼児用援助要請行動チェックリストの各項目についての回答結果に関する基礎統計量および分析結果(回答度数分布、平均得点、標準偏差、性差の検定結果)をTable 1に示す。

各項目得点についてMann-WhitneyのU検定を用いて性差を確認したところ、有意差が認められたのは「14) うまくできないことがあると、わがままを言って困らせる。」(男児>女児,  $p < .05$ )、「19) 自分ではしたくないことがあると、やってほしくて「できない」と訴える。」(男児>女児,  $p < .01$ )の2項目であった。

**Table 1** 幼児用援助要請行動チェックリストの各項目回答結果

	回答分布 (上段:度数 下段:%)						平均		標準偏差		性差 (Mann-Whitney の U 検定)
	全く あてはま らない 1	あてはま らない 2	やや あてはま らない 3	やや あて はまる 4	あて はまる 5	非常に あて はまる 6	全体 (n=63)	男児 (n=31) 女児 (n=32)	全体 男児 女児		
言語的要請	1) 大きくても食べられないものがあれば「小さくして」 など、食事中にしてほしいことを言う。			1 (1.59)	9 (14.29)	15 (23.81)	38 (60.32)	5.43	5.35 5.44	0.80 0.76	0.95
	3) ひとりできつやくつ下がはけなかったり、服が着られ ないと「できない〜」と知らせてくる。				1 (1.59)	16 (25.40)	46 (73.02)	5.71	5.81 5.66	0.49 0.55	0.40
	5) 探しものが見つからないと「ない〜、どこいった ん?」と聞いてくる。		2 (3.17)	1 (1.59)	4 (6.35)	10 (15.87)	46 (73.02)	5.54	5.77 5.28	0.93 1.17	0.50
	8) トイレを失敗したり、おしりが拭けないと、失敗した ことや拭けていないことを伝えてくる。	1 (1.59)	2 (3.17)	5 (7.94)	7 (11.11)	19 (30.16)	29 (46.03)	5.03	4.74 5.19	1.20 1.23	1.37
	10) 友達やきょうだいとケンカするとその状況を言いく る。			5 (7.94)	10 (15.87)	15 (23.81)	33 (52.38)	5.21	5.32 5.06	0.99 1.11	0.87
	12) 折り紙の折り方がわからないなど、何かを作るときに わからないと、「わからない」と言ってもってくる。	1 (1.59)		1 (1.59)	4 (6.35)	17 (26.98)	40 (63.49)	5.48	5.58 5.38	0.90 1.04	0.72
	15) 手の届かないところにあるものが欲しいときには、と ってほしいことを伝える。			1 (1.59)	1 (1.59)	12 (19.05)	49 (77.78)	5.73	5.81 5.66	0.57 0.65	0.48
非言語的要請	17) 読めない文字があったり、わからないことがあると 「おしえて」と言う。	1 (1.59)	1 (1.59)	3 (4.76)	5 (7.94)	13 (20.63)	40 (63.49)	5.35	5.06 5.47	1.10 0.98	1.41
	2) 苦手な食べ物が出てきたとき、食べられない (食べたく ない) ことを目で訴える。	13 (20.63)	11 (17.46)	3 (4.76)	9 (14.29)	10 (15.87)	17 (26.98)	3.68	3.94 3.47	1.95 1.92	1.97
	4) くつやくつ下がはけなかったり、服が着られないと、 黙って持つてくる。	33 (52.38)	15 (23.81)	8 (12.70)	4 (6.35)	3 (4.76)		1.87	1.84 1.91	1.16 1.30	1.00
	7) 困ったことがあると、黙って近くにやってくる。	22 (34.92)	10 (15.87)	9 (14.29)	17 (26.98)	5 (7.94)		2.57	2.48 2.63	1.41 1.52	1.34
	9) トイレに行きたいとき、もじもじしながら見つめてく る。	30 (47.62)	13 (20.63)	8 (12.70)	6 (9.52)	4 (6.35)	2 (3.17)	2.16	2.13 2.19	1.44 1.53	1.36
	13) 自分ひとりでできないことがあると、手伝ってほしい ような表情をする。	7 (11.11)	13 (20.63)	6 (9.52)	15 (23.81)	8 (12.70)	14 (22.22)	3.73	3.87 3.69	1.71 1.65	1.77
	16) くつやくつ下がはけなかったり、服が着られないと、 手をひっぱってその場に連れて行く。	25 (39.68)	19 (30.16)	8 (12.70)	4 (6.35)	5 (7.94)	2 (3.17)	2.22	2.10 2.34	1.41 1.52	1.30
間接的要請	18) できないこと、わからないことがあると、助けてもら えるまでじっと待っている。	40 (63.49)	14 (22.22)	8 (12.70)	1 (1.59)			1.52	1.61 1.44	0.78 0.72	0.84
	6) あるはずのおもちゃ等がないとイライラする。	8 (12.70)	11 (17.46)	4 (6.35)	16 (25.40)	12 (19.05)	12 (19.05)	3.78	4.16 3.41	1.69 1.68	1.63
	11) 友達やきょうだいがおもちゃ等を貸してくれないと、 泣くなど大人 (親・保育者など) に感情をぶつける。	4 (6.35)	3 (4.76)	7 (11.11)	8 (12.70)	12 (19.05)	29 (46.03)	4.71	5.03 4.50	1.56 1.59	1.49
	14) うまくできないことがあると、わがままを言って困ら せる。	4 (6.35)	7 (11.11)	9 (14.29)	21 (33.33)	11 (17.46)	11 (17.46)	3.97	4.39 3.56	1.44 1.39	1.38
	19) 自分でしたくないことがあると、やってほしくて「で きない」と訴える。		2 (3.17)	5 (7.94)	8 (12.70)	20 (31.75)	28 (44.44)	5.06	5.42 4.75	1.09 1.16	0.92
	20) 自分の思い通りにならないことがあると、わざと叱ら れるようなことをする。	12 (19.05)	13 (20.63)	8 (12.70)	12 (19.05)	10 (15.87)	8 (12.70)	3.3	3.42 3.06	1.70 1.66	1.77

\*p<.05 \*\*p<.01

**2. 幼児用援助要請行動チェックリストの因子得点**

幼児用援助要請行動チェックリストの因子得点 (言語的要請得点、非言語的要請得点、間接的要請得点) の基礎統計量および分析結果 (平均、標準偏差、因子得点の差の検定結果、性差の検定結果) を Table 2 に示す。

各因子得点の性差を確認するため Mann-Whitney の U 検定を行った結果、間接的要請得点で有意差 (男児>女児, p<.01) が認められた。また、各因子得点間について Friedman 検定を行った結果、有意差 (p<.001) が認められたため多重比較を行った。その結果、言語的要請得点と非言語的要請得点の間に p<.01 の有意差、非言語的要請得点と間接的要請得点の

**Table 2** 幼児用援助要請行動チェックリスト 因子得点に関する分析結果

	平均				標準偏差		性差の検定 (Mann-Whitney の U 検定)
	全体 (n=63)	差の検定 (Friedman 検定)	男児 (n=31) 女児 (n=32)	差の検定 (Friedman 検定)	全体 男児 女児		
言語的要請	5.41	5.44 5.38	5.44 5.38	0.54	0.53 0.56		
非言語的要請	2.54	2.57 2.52	2.57 2.52	1.00	0.96 1.05		
間接的要請	4.17	4.48 3.86	4.48 3.86	0.95	0.81 0.99	男児>女児**	

\*\*p<.01 \*\*\*p<.001

間、言語的要請得点と間接的要請得点に  $p < .001$  の有意差が認められ、言語的要請得点が最も高く、次に間接的要請得点、最も低いのは非言語的要請得点であることが示された。

### 3. 幼児の援助要請行動と気質との関係

幼児用援助要請行動チェックリストの因子得点（言語的要請得点、非言語的要請得点、間接的要請得点）と気質の下位尺度得点との関係について Spearman 順位相関係数を用いて検討した。その結果を Table 3 に示す。

言語的要請得点は「微笑みと笑い」との間に弱い正の相関 ( $\rho = .33, p < .05$ ) が認められた。非言語的要請得点は「かなしさ」との間に正の相関 ( $\rho = .41, p < .01$ )、「内気」との間に弱い正の相関 ( $\rho = .36, p < .01$ ) が認められた。

間接的要請得点は「抑制のコントロール」「反応性の低下／なだまりやすさ」との間に弱い負の相関 ( $\rho = -.27, p < .05; \rho = -.31, p < .05$ )、「不快」「怒り／欲求不満」との間に弱い正の相関 ( $\rho = .30, p < .05; \rho = .37, p < .01$ ) が認められた。

性別を分けて確認したところ、男児では言語的要請得点と「注意の焦点化」の間に弱い正の相関 ( $\rho = .38, p < .05$ )、非言語的要請得点と「かなしさ」との間に正の相関 ( $\rho = .42, p < .05$ ) が認められた。また、間接的要請得点は「反応性の低下／なだまりやすさ」と負の相関 ( $\rho = -.47, p < .01$ )、「抑制のコントロール」

「微笑みと笑い」との間に弱い負の相関 ( $\rho = -.37, p < .05; \rho = -.36, p < .05$ )、「怒り／欲求不満」との間に弱い正の相関 ( $\rho = .38, p < .01$ ) が認められた。女児では、言語的要請得点と「微笑みと笑い」との間に弱い正の相関 ( $\rho = .39, p < .05$ )、非言語的要請得点と「かなしさ」との間に正の相関 ( $\rho = .41, p < .05$ )、「不快」「内気」「快（低）」との間に弱い正の相関 ( $\rho = .35, p < .05; \rho = .40, p < .05; \rho = .36, p < .05$ ) が認められた。また、間接的要請得点は「不快」「かなしさ」と正の相関 ( $\rho = .48, p < .01; \rho = .46, p < .01$ ) が認められた。

### 4. 幼児の援助要請行動と完全主義との関係

幼児用援助要請行動チェックリストの因子得点（言語的要請得点、非言語的要請得点、間接的要請得点）と完全主義因子得点（こだわり・心配得点、完全願望得点、高目標設定得点）との Spearman 順位相関係数を Table 4 に示す。

言語的要請得点はいずれの完全主義因子得点との間にも有意な相関は認められなかった。非言語的要請得点は完全主義の全ての因子得点（「こだわり・心配」「完全願望」「高目標設定」）との間に弱い正の相関 ( $\rho = .38, p < .01; \rho = .28, p < .05; \rho = .28, p < .01$ ) が認められた。間接的要請では「こだわり・心配」との間に弱い正の相関 ( $\rho = .37, p < .01$ ) が認められた。

また、男児では非言語的要請得点と「こだわり・心配」「完全願望」との間に弱い正の相関 ( $\rho = .39, p < .05$ ) が認められた。

Table 3 幼児用援助要請行動チェックリスト因子得点と気質下位尺度得点との相関係数（Spearman の順位相関係数）

	全体 (n=63)			男児 (n=31)			女児 (n=63)		
	言語的 要請	非言語 的要請	間接的 要請	言語的 要請	非言語 的要請	間接的 要請	言語的 要請	非言語 的要請	間接的 要請
抑制のコントロール	.10	-.09	-.27*	.25	.00	-.37*	-.08	-.04	-.19
反応性の低下・なだまりやすさ	-.02	-.21	-.31*	-.06	-.18	-.47**	-.01	-.13	-.21
注意の焦点化	.22	.15	-.02	.38*	.08	-.20	.05	.27	.08
知覚的鋭敏性	.23	.04	-.06	.25	.20	-.13	.26	-.09	.04
快（低度）	.11	.21	.04	.01	.00	-.11	.23	.36*	.20
微笑みと笑い	.33**	-.17	-.09	.27	-.27	-.36*	.39*	-.07	.07
活動性レベル	-.07	.03	.04	-.03	.02	.03	-.09	-.06	.05
接近・肯定的な予測	.17	-.06	.18	.17	-.18	.24	.16	.02	.21
衝動性	-.01	.00	.25	-.04	-.12	.32	.00	.12	.21
快（高度）	-.05	.10	.08	-.05	.19	.21	-.10	-.06	-.18
怒り・欲求不満	.09	.20	.37**	.07	.13	.38*	.10	.19	.34
不快	.12	.19	.30*	.07	.04	.22	.19	.35*	.48**
かなしさ	-.07	.42**	.20	-.07	.42*	.05	-.02	.41*	.46**
内気	.02	.36**	.17	.02	.30	.12	.06	.40*	.21
恐れ	.14	.01	.11	.04	.03	-.10	.22	.01	.28

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

**Table 4** 幼児用援助要請行動チェックリスト因子得点と完全主義因子得点との相関係数 (Spearman の順位相関係数)

		こだわり・心配	完全願望	高目標設定
全体 (n=63)	言語的要請	-.09	-.07	-.11
	非言語的要請	.38**	.28*	.28*
	間接的要請	.37**	.10	.07
男児 (n=31)	言語的要請	-.16	.11	-.07
	非言語的要請	.39**	.36*	.31
	間接的要請	.22	.06	.00
女児 (n=32)	言語的要請	.01	-.23	-.08
	非言語的要請	.38*	.26	.27
	間接的要請	.64**	.06	.23

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$ 

.01;  $\rho = .36, p < .05$ )、女児では非言語的要請得点と「こだわり・心配」との間に弱い正の相関 ( $\rho = .39, p < .05$ )、間接的要請得点と「こだわり・心配」との間に正の相関 ( $\rho = .64, p < .01$ ) が認められた。

#### IV 考察

##### 1. 幼児用援助要請行動チェックリストの回答結果

幼児用援助要請行動チェックリストの各項目についての回答分布を見ると、言語的要請に分類される項目群では「非常にあてはまる」という回答に偏る傾向があり、非言語的要請に分類される項目群では「全くあてはまらない」という回答に偏る傾向がみられた。養育者と保育者への質問紙調査によって乳幼児の援助要請行動についての情報（援助要請行動が生起する状況、具体的な行動など）を収集し分類、検討した西元 (2021) の研究では、養育者は言葉で訴える発語による援助要請行動に分類される行動の記述が多く、保育者は情動表出など言葉によらない援助要請行動の記述が多いことを指摘している。今回の調査は養育者を対象としていることから、言語的要請に分類される項目群については「あてはまる」という回答が多く、非言語的要請に分類される項目群に対しては「あてはまらない」という回答が多いことは、西元 (2021) の示した養育者の記述内容の傾向と一致する結果といえる。この結果は、3歳児の援助要請は言語的な要請行動が多いことを意味するとも考えられるし、あるいは、養育者からは言語的要請は認識しやすいが非言語的要請は認識しにくいということの意味するとも考えられる。今回は3歳児のみの分析であるが、幼児期に縦断的に調査することで、言語的要請がよくあてはまるこ

とについて、年齢による特徴であるのかを検討する必要がある。回答者についても養育者だけでなく保育者など複数の回答者が同一対象について回答し、その結果を比較して被援助者による援助行動の違いについても検討する必要があると考えられる。また、間接的要請についても年齢的变化があるのか、被援助者による違いがあるのかについても検討する必要がある。

次に、先行研究では性差が指摘されているため、各項目について検定を行ったところ、性別による有意差はほとんどの項目で認められなかった。しかしながら、間接的要請に分類される項目である「14) うまくできないことがあると、わがままを言って困らせる。」「19) 自分でしたくないことがあると、やってほしくて「できない」と訴える。」では男児のほうが女児よりも得点が高いことから、この2項目については女児よりも男児のほうが「あてはまる」ということが示唆された。Thompson, Cothran, & McCall (2012) は2歳～5歳児を対象に行った実験観察において、女児は年齢が上がるにつれて援助要請行動が多くなることを示している。また、Benenson & Kounazarian (2008) は課題遂行時に援助要請行動が出現する早さについて、女児のほうが男児よりも早いことを示している。つまり、先行研究においては男女を比較した場合、女児のほうが援助を要請する行動がよく見られるということが示唆されているが、今回の結果からは女児のほうがよく援助要請行動を行っているという結果は確認できなかった。むしろ、間接的な援助要請行動については男児のほうが女児よりもよく行っていることが示唆されたことは大変興味深く、間接的な援助要請行動をよく行う個人特性についての検討は今後の課題の1つである。

## 2. 幼児用援助要請行動チェックリストの因子得点

言語的要請、非言語的要請、間接的要請という3つの項目群の平均点の差を検討したところ、言語的要請が最もよく行われる援助要請行動であり、次いで間接的要請、そして非言語的要請はあまり行われていない要請行動であることが示された。男女別に検討した結果でも同様の傾向が確認されている。3歳児の援助要請行動としては言語的な要請が主であることが示されたが、間接的要請もよく行われている要請行動であることが示された。間接的要請は言語的要請や非言語的要請のように、被援助要請者に向けて直接的に示されるような行動ではなく、求めている援助内容が明確ではない行動である。そうした行動が3歳児に特徴的であるのか、今後発達するにつれてどのように変化していくのか検討する必要がある。

性差については、因子得点による分析結果からも間接的要請については男児のほうがよく行っていることが示唆された。3歳児では直接的な援助要請行動である言語的要請と非言語的要請には性差がみられず、間接的要請にのみ性差がみられたことについて、この傾向が4歳児、5歳児でも継続されるのか、あるいは年齢が上がるにしたがって、言語的要請や非言語的要請においても性差が出現するのかどうかを検討する必要がある。

## 3. 幼児の援助要請行動と気質との関係

援助要請行動の3つの因子と気質下位尺度との関係を検討したところ、言語的要請との相関関係が認められたのは「微笑みと笑い」だけであった。言語的要請「微笑みと笑い」は刺激の強度、頻度、複雑さ、不一致の程度等の変化に伴う肯定的感情の程度であり、朗らかさの程度を示す気質である。よく笑う、朗らかであるということは、他者に対して自身の感情を表出することに抵抗感が低いことの現れと考え、言語による明確な援助要請への抵抗についても感情表出と同じく抵抗感が低いために、朗らかであるほど言語による援助要請行動をよく見られるのではないだろうか。あるいは、普段から肯定的な感情表出を行っていることが周囲を受容的な環境、はっきりと言葉で援助を求めることが容易な環境にしているということも考えられる。また、「微笑みと笑い」は男児では間接的要請

行動と負の相関関係にあり、朗らかな男児は言語による要請をあまり行わないということが示された。このことについて、朗らかな男児は間接的ではなく直接的な援助要請行動をする傾向があるのかどうかをさらにデータを重ねて検討していく必要がある。

次に、非言語的要請は「かなしさ」「内気」と正の相関関係が認められた。「かなしさ」は困難、失望、喪失などと関連する否定的情動もしくは気分の落ち込み、活動力の減退の程度であり、悲しいことがあったときに落ち込んだり、取り乱したりする程度をあらわす。「内気」は新奇刺激や不確定さが含まれる状況で接近を抑制する傾向であり、新しいことや初めて会った人に対して消極的な傾向をあらわしている。落ち込みやすい傾向や新しいことや初めての人に尻込みするような傾向の子どもは、言葉ではっきり示さず、視線や接近行動といった援助者に対して言葉以外のアプローチで援助してほしいという意図をアピールする傾向があるといえる。言い換えれば、落ち込みやすさを感じる子ども、消極的な印象の子どもは、言葉ではっきりと援助を求めないものの、言葉以外の方法ではあるものの明確な方法で援助を求めることが示唆されたと考えられる。ただし、女児については「かなしさ」と間接的要請との間にも正の相関関係が認められている。女児の場合には落ち込みやすい傾向がある場合、言葉を用いないものの援助を求めていることが明確な援助要請だけでなく、援助を求めているという意図がわかりにくい間接的な援助要請を行う傾向もあるといえる。

さらに、間接的要請は「不快」「怒り／欲求」と正の相関関係が認められ、「抑制のコントロール」「反応性の低下／なだまりやすさ」と負の相関関係が認められた。「不快」は与えられた刺激の感覚的性質などによって生じる否定的感情の程度であり、不快になりやすい傾向をあらわし、「怒り／欲求」は行っている行動や目標を妨害されたときの否定的感情の程度であり、イライラしやすい程度をあらわす。間接的要請は援助を必要とするような困ったときに、否定的な感情を表出したり、イライラするなど、一見、援助を求めていることがわかりにくい方法での援助要請行動である。否定的な感情を表出しがちであるという気質やイライラしやすいという気質であることが、援助を要請するという行動にも反映されていると考えられる。一



方、「抑制のコントロール」は新奇刺激や不確定な状況に対して、または指示によって、不適切な接近行動を抑制したり、抑制しようとする傾向であり、我慢強さの度をあらわし、「反応性の低下／なだまりやすさ」は不機嫌や興奮のピークからの回復の程度である。我慢強い、なだまりやすいといった自己の制御性の高い子どもほど否定的な感情を表出したり、イライラするといった間接的な方法で援助を要請することが少ないといえる。そもそも我慢強い、なだまりやすい気質によって否定的な感情表出は抑制されていると考えられるが、そうした気質傾向の子どもは言語、非言語問わず、直接的な援助要請行動ができていのかどうかは興味深く、今後の検討課題である。

援助要請行動と気質との関係について男女の違いがみられた。男児のみに言語的要請と「注意の焦点化」との間に正の相関関係が認められ、女兒のみに非言語的要請と前述の「不快」および「快（低）」との間に正の相関関係が認められた。「注意の焦点化」とは集中して何かに取り組むときの持続性であり集中力の度をあらわす気質であり、「快（低）」とは穏やかな刺激を好む傾向をあらわす気質である。これらの気質と援助要請行動との関係は男児あるいは女兒のみにしか認められなかったが、さらにデータを増やした分析によってさらなる検討が必要である。

#### 4. 幼児の援助要請行動と完全主義との関係

援助要請行動の3因子と完全主義の3因子（「こだわり・心配」「完全願望」「高目標設定」）との関係を検討したところ、言語的要請は完全主義（3因子）の間に相関関係は認められなかった。非言語的要請では完全主義（3因子）すべてと正の相関関係が認められた。間接的要請とは「こだわり・心配」との間に正の相関関係が認められた。これらの結果から完全願望という特性が非言語的要請に関係していることが示された。完全主義とは成功にこだわり、完璧や高い目標を目指す傾向である。「こだわり・心配」はこだわりの強さであり、きちんとできることにこだわる傾向、きちんとできているかとても気にする傾向をあらわす。「完全願望」は完璧をめざす傾向であり、何ごとも完璧にしたい、最後まできちんとしたいという思いの強さをあらわす。「高目標設定」は高い目標を立てたり、他の人よりもできる自分でありたい気持ちの強さをあ

らわす。完全願望の傾向が強い子どもは、できないことはできるようにしたいという気持ちが強い一方で、できる自分でありたい気持ちも強いことから、自分ひとりでできないとき、援助が必要なときに援助を要請するが、できないということをはっきりということに抵抗があると考えられる。そのため非言語的要請と完全主義のすべての要素との間には関係が認められたのだろう。男女別でみると、男児では非言語的要請と「こだわり・心配」「完全願望」との間に正の相関関係、女兒では非言語的要請および間接的要請と「こだわり・心配」との間に正の相関関係が認められた。特に女兒は間接的要請と「こだわり・心配」との相関関係が顕著であるが、男児では間接的要請と「こだわり・心配」との相関関係は認められず、一方で男児では非言語的要請と「完全願望」との相関関係が認められるが女兒ではそれが認められなかった。こうした性別による援助要請と完全願望との関係の違いについても、気質と援助要請行動との関係と同様にさらにデータを増やした分析によってさらなる検討が必要である。

#### 5. 今後の展望

本研究では幼児の援助要請行動を質問紙調査によって定量的に捉える試みを行うとともに、援助要請行動を規定する個人特性として「気質」と「完全主義」を取り上げ、その関係を検討した。今回は3歳児のみを対象としているが、今後4歳児、5歳児のデータを収集し引き続き検討していくことを予定している。今回の結果について考察が困難であった部分については、4歳児5歳児のデータを重ねていき、それらとの比較を通して再検討していく。また、3歳児から5歳児までの援助要請行動の発達について縦断データを用いた検討を行っていく。

#### 付記

本研究はJSPS 科研費（JP19K02656）の助成を受けて実施した研究の一部です。本研究にご協力いただきました認定こども園の保護者の皆様ならびに保育者の皆様に心より感謝いたします。

## 【引用文献】

- Benenson, J. F., & Koulouzian, M. (2008). Sex differences in help-seeking appear in early childhood. *British Journal of Developmental Psychology*, 115, 570-578.
- Burns, D. D. (1980). The perfectionist's script for selfdefeat. *Psychology Today*, NOV., 34-52.
- Cluver, A., Heyman, G., & Carver, L. J. (2013). Young children selectively seek help when solving problems. *Journal of Experimental Child Psychology*, 115, 570-578.
- DePaulo, B. M. (1983). Perspective on help-seeking. In B. M. DePaulo, A. Nadler, & J. D. Fischer (Eds.), *New Directions in Helping: Vol.2 Help-seeking*. New York: Academic Press, 3-12.
- Flett, G. L., & Hewitt, P. L. (2002). Perfectionism: Theory, research, and treatment. Washington, D. C.: American Psychological Association.
- Frost, R. O., Marten, P., Lahart, C., & Rosenblate, R. (1990). The dimensions of perfectionism. *Cognitive Therapy and Research*, 14, 449-468.
- 古橋健悟・五十嵐祐 (2021). 援助要請における援助者選択に関する研究と展望. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, 68, 17-25.
- 本田真大 (2015). 幼児期, 児童期, 青年期の援助要請研究における発達の観点の展望と課題. 北海道教育大学紀要 教育科学編, 65, 45-54.
- 本田真大・新井邦二郎・石隈利紀 (2015). 援助要請行動から適応感に至るプロセスモデルの構築. カウンセリング研究, 48, 65-74.
- 池田七海・岡田涼 (2019). 保育場面における幼児の援助要請行動. 子育て研究, 9, 31-41.
- 石黒良和・榎本玲子・山上精次・藤岡新治 (2016). 援助要請と生活適応感の関連性～自尊感情と他者軽視の観点から～. 専修人間科学論集 心理学篇, 6(1), 31-40.
- 栗林克匡 (2019). シャイネスが援助要請とサポート受容に及ぼす影響. 北星学園大学社会福祉学部北星論集, 56, 1-6.
- 新岡美希 (2018). 身近な他者に対する援助要請と自己開示の関連. 北星学園大学大学院論集, 9, 35-43.
- 西元直美 (2015). 幼児の完全主義に関する縦断的検討 - 発達的变化および気質との関連について -. 関西福祉科学大学紀要, 19, 1-11.
- 西元直美 (2021). 乳幼児の援助要請行動に関する発達の検討. 総合福祉科学研究, 13, 47-58.
- 西元直美・山本正顕 (2022). 幼児用援助要請行動チェックリストの開発 I. 日本発達心理学会第 33 回大会, 211.
- 西元直美 (2023). 幼児用援助要請行動チェックリストの開発 II. 日本発達心理学会第 34 回大会, 211.
- 沼田 宙 (2006). 認知的個人差と気質の関係に関する一研究. 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科修士論文.
- 大谷佳子・桜井茂男 (1995). 大学生における完全主義と抑うつ傾向および絶望感との関係. 心理学研究, 66, 41-47.
- Putnam, S. P., & Rothbart, M. K. (2006). Development of short and very short forms of the Children's Behavior Questionnaire. *Journal of Personality Assessment*, 87, 103-113.
- Rickwood, D., Deane, F., Wilson, C. J., & Ciarrochi, J. (2005). Young people's help-seeking for mental health problems. *Australian E- Journal for the Advancement of Mental Health*, 4, 218-251.
- 桜井茂男. (2005). 子どもにおける完全主義と抑うつ傾向との関連. 筑波大学心理学研究, 30, 63-71.
- Thompson, R. B., Cothran, T., & McCall, D. (2012). Gender and age effects interact in preschoolers help-seeking: Evidence for differential responses to changes in task difficulty. *Journal of Child Language*, 39, 1107-1120.